

研究ノート

留学生が日本語を教える授業の取り組みと課題

吉兼 奈津子

キーワード：留学生、模擬授業、直接法、初級文法

1. はじめに

現在、海外で日本語を教えている日本語教師は74,592人で、その数は過去の調査で2番目に多くなっており、そのうち約80%が日本語を母語としない教師である(国際交流基金2021)。神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部日本語コースに在籍する学生は全員外国人留学生で、その多くが将来日本で就職すること、または帰国して日本と関係がある仕事をするを旨として学んでいるが、中には帰国して日本語教師になりたいという留学生もわずかながらいる。では、このような日本語教師になりたい留学生だけが将来日本語を教える機会に接するのだろうか。日本で就職して働くことになった留学生も、今後日本語を教える機会があるのではないかと考える。2022年の厚生労働省の調査によると、日本国内にいる外国人労働者数は1,822,725人で過去最高を更新したという。深刻化する日本の人手不足に対応するために今後も外国人労働者は増加すると推測されているが、このような外国人労働者の中には日本語をある程度学んでから日本で働く人もいれば、十分な日本語力を身に付けられないまま働く人もいるであろう。そのようなことを考えると、将来留学生は自分の母語にかかわらず、日本での就職先で外国人に日本語を教えることがあるかもしれない。また、将来日本語を教える機会がない場合でも、相手の外国人が知らないことを日本語でわかりやすく教えることは、わかりやすく伝える手段を学ぶことにもつながると考えられる。これに関しては、2020年に厚生労働省が発表した「就労場面で必要な日本語能力の目標設定ツール」にも同様の内容が認められる。そこでは、就労場面における日本語能力の一つとして「仲介(橋渡し)」という言語活動が設定されている。この「仲介(橋渡し)」とは、「企業内でまだ日本語に慣れていない同僚に対して、仕事や職場、寮生活等に関することの理解や行動を助けるために、読んだり聞いたりして得られる情報を母語や相手にわかる言語で伝えること(厚生労働省2020、p.29)」であると説明されている。つまり、異なる母語同士で互いに理解できる言語が日本語である場合には、やさしい日本語など相手に合わせて日本語でわかりやすく伝える日本語能力も就労場面で必要となるのである。このようなことから、留学生が日本語を教える体験をすることは将来役に立つのではないかと考え、「日本語を教える体験」を授業に取り入れることにした。

筆者が担当した「日本語を教える体験」を取り入れた授業は、週1回行われる全15回の授業である。受講した留学生は、事前に日本語教育学や日本語教授法などの専門科目を学ん

でいるわけではないため、授業内容は「留学生が直接法で日本語を教える体験をすること」「その体験のために最低限必要な知識を学習すること」という2点を中心にした。授業の計画にあたっては、大和（2017）の実践を参考にした。日本語教育実習に関する研究については日本語を母語とする学生を対象とした報告は多く見られるが、大和（2017）は日本語非母語話者を対象とした日本語教育実習を行っており、日本語コースの留学生を対象とした授業に援用しやすいと考えたからである。この授業は2021年度から行っており、今回で2回目であるが、授業を通していくつか課題が浮かび上がってきた。

そこで、本稿では、留学生が直接法で日本語を教える体験を取り入れた授業の取り組みを報告し、授業を通して見られた課題について検討したい。

2. 授業

2.1 授業概要

本稿で報告する授業概要は表1の通りである。

表1. 授業概要

授業名	日本語専攻演習Ⅱb（選択科目）	
授業回数	週1回、全15回（1回90分）	
受講生	人数	23名
	国籍	中国18名、インドネシア2名、ベトナム3名
	学年	大学2年生
	日本語能力	中級～上級レベル
	大学入学前の日本語学習歴（日本）	日本の日本語教育機関または日本の高等学校で2年以上
主な使用テキスト	『みんなの日本語 初級Ⅰ 第2版 本冊』、『日本語の教え方ABC：「どうやって教える？」にお答えします』	
授業内容	第1回 ガイダンス、DVD視聴（初級日本語の教え方） 第2回 直接法による教え方の学習 第3回 模擬授業①（母語）の準備 第4回 模擬授業①（母語）の準備・練習 第5、6回 模擬授業①（母語）の実施・振り返り 第7～10回 直接法による初級日本語の教え方の学習、教案の書き方の学習 第11～13回 模擬授業②（日本語）の準備・練習 第14、15回 模擬授業②（日本語）の実施・振り返り	

2.2 授業内容

全15回の授業は前半と後半で大きく2つに分けた。前半の授業(第1~6回)では模擬授業①で母語を、後半の授業(第7~15回)では模擬授業②で日本語を教えられるように、教え方の学習と模擬授業の準備を行った。直接法で日本語を教える模擬授業の前に、留学生の母語を教える模擬授業を設定したのは、筆者が以前参加した授業を参考にしたもので、クラスの留学生が日本語の既習者であることから「相手が知らないことばを教える」という点でより現実に近い体験ができると思ったためである。

前半(第1回~第6回)の授業では、まず授業の流れを見てもらうために、初級日本語の教え方のDVD『DVDで授業の流れがわかる 日本語の教え方のコツ』¹⁾を視聴した。このDVDには日本語の学習経験がない外国人を対象に日本語を教える授業が収録されている。このDVDの授業は、学習経験のない相手にことばを教えるという点で今回の模擬授業の参考になるところが多く、「導入」「基本練習(以下、練習と呼ぶ)」「応用練習(以下、活動と呼ぶ)」²⁾の流れわかりやすかったため使用した。DVDを視聴する前には、大和(2017)を参考に、注目すべきポイントとして「教師が繰り返し行っていたこと」「教師が使っていた日本語(特徴)」「教師の説明の仕方」「教師が学習者の理解を確認するために使っていた方法」「教える順番」「その他」という点を提示し、気づいたことを書いてもらった。何度か繰り返し視聴し、教え方で大切なポイントをクラス全体で共有したあと、直接法の授業の流れとして「導入」「練習」「活動」について簡単に説明した。まずはDVDの教え方を参考にして自分の母語を教える体験をすることが目的なので、すぐに母語の模擬授業の準備を始めてもらった。その後、母語が同じ学生が2、3人でチームとなり、どのような表現を教えるか決めた。昨年度の授業を踏まえ、教える表現はその言語を知らない人でもすぐに覚えられる実用的な表現を3~4つとした。次に、それらの表現をどのように教えるか考えたあと「導入」「練習」「活動」に分けて簡単な教案を作成してもらった。教案作成では、昨年度の学生が書いた教案の例を参考として提示した。教具の準備、練習を経て、教師役の学生に2~3人で内容を分担し、母語の模擬授業を10分程度で実施してもらった。模擬授業後は、全員に授業評価³⁾の提出を課した。この授業評価の結果とともに筆者が録画した模擬授業のビデオを各チームに渡し、それを見ながら授業の振り返りをシート⁴⁾に記入してもらった。

後半の授業(第7回~第15回)では、『初級を教える』(国際交流基金2007)をもとに、日本語の模擬授業に向けて、直接法で行う「導入」「練習」「活動」の学習をより詳しく取り入れた。「導入」ではどのような説明を行うか、どのような教具を使用すればわかりやすいかなどについて学生と考えた。「練習」ではパターンプラクティスの説明と練習、「活動」では学習項目に合わせた活動をいくつか紹介した。学生は全員日本国内の日本語学校または高等学校で日本語を学んだ経験があるが、来日してから2年以上経過しているため、その当時どのような練習を行っていたかについては思い出せる学生もいたが、教師が具体的にどのような方法を使って導入を行っていたかということについてはあまり覚えていなかった。その

ため、「導入」ではより時間を割いて説明した。授業準備では、時間がかかることや学生の負担が大きいことを考え、日本語の模擬授業も学生2～3人で1チーム、合計8チーム作り、授業内容を分担してもらった。模擬授業で扱う学習項目は、「よく使う」「間違えやすい」「授業時間内に模擬授業の準備が終了する」という点から筆者が事前に『みんなの日本語 初級I 第2版 本冊』の中から選んだものを、チームごとに決めてもらった。扱った学習項目は表2のとおりである。

表2. 模擬授業②で扱った学習項目（『みんなの日本語 初級I 第2版 本冊』）

チーム	担当課	学習項目
①	7課	わたしは〈人〉に〈物〉をあげます・もらいます・やります、〈人〉はわたしに〈物〉をくれます
②	15課	〈て形〉もいいですか
③	17課	ない形、〈Vない形〉ないてください
④	18課	辞書形、〈辞書形〉ことができます
⑤	19課	た形、〈た形〉ことがあります
⑥		〈た形〉り、〈た形〉りします
⑦	23課	〈辞書形〉／〈ない形〉ない／〈い形容詞〉／〈な形容詞〉な／〈名詞〉のとき
⑧	25課	〈普通形過去〉ら、～(仮定条件)

その後の教案作成では、今回は筆者が作成した例を示しながら、詳しく書くよう指示した。教案が完成したチームから模擬授業の準備を始めてもらい、準備ができたチームから練習に移った。練習はチーム内だけでなく他のチームとも行ってアドバイスし合い、修正する時間を設けた。日本語の模擬授業は、学習者役6人を対象に1チーム15分～20分で実施してもらった。今回は、観察者、学生役、筆者から授業に対するコメントをその場で行った。そして最後に、授業後の課題として、録画したビデオを見ながら日本語の模擬授業の体験をシート³に書いて振り返ってもらった。

3. ことばを教える体験と課題

今回の授業では留学生が直接法で模擬授業を体験すること、さらには相手が知らないことばをわかりやすく日本語で教えることが授業の目的である。以下では、その模擬授業（母語の模擬授業、日本語の模擬授業）を通して見られた課題について検討したい。

3.1 母語の模擬授業

1つ目の課題は、母語で模擬授業を行う目的の明確化である。模擬授業を母語で行う主な

目的の一つは「より現実に近い状況で、相手が知らないことばを教える体験をする」ことであるが、今回の授業では学生の国籍のバランスから、この目的を達成することが困難に思われた場面があった。受講生の国籍を見てみると、中国人が全体の8割を占めており、模擬授業を行った9チームのうち7チームが中国語を母語とする学生であった。クラスには他にインドネシア人、ベトナム人の学生もいたが、彼らに中国人7チーム分全ての学習者役をしてもらうのは大きな負担であると考え、教師役の学生と母語が同じ学生にも学習者役を担当してもらった。そのため、「より現実に近い状況で、相手が知らないことばを教える体験をする」ことが困難だと思われたチームがあった。具体的には、中国語を教えた4チームの模擬授業で、「例文の状況・意味を理解する手段・情報が不足している」「早口で例文を言う」などの原因で、扱った表現の意味が理解できないと筆者が判断した場面があった。しかし、学生の評価を見てみると、学習者役の学生と観察者の学生は、意味が伝わらなかった4チーム中2チームに対して4.5以上と高い評価を行っていた（5段階評価5が最も良い）。つまり、導入された表現の意味理解に困難を感じていない学生が多く、「相手が知らないことばを教える体験をする」ことができなかったことになる。

初めに母語の模擬授業を取り入れると、あとで日本語の模擬授業をする際に負担がより少ない状態で模擬授業が体験できるので、直接法を段階的に学べる機会としては大きな利点となる。しかし、「相手が知らないことばを教える体験をする」ことを目的とするのであれば、受講生の国籍のバランスをよく検討する必要がある。母語の模擬授業の目的として何を重視するかを明確にしておかなければならない。

3.2 授業見学に代わるもの

2つ目の課題は、授業見学が実施できなかったことである。大和（2017）では、日本語教育実習で日本語を母語としない学生が授業見学後に書いたレポートから、授業見学を重ねることによって、授業を客観的に細かい点まで観察できるようになったり、学生自身の教壇実習と関連付けて考えられるようになったりして、学生の考えが深まっていったと述べられている。このような授業見学ができれば確かに学びも多く、学生も自分の模擬授業に活かせると思われる。実際に、今回の日本語の模擬授業では、前半に発表したチームで指摘された点は後半に発表したチームではあまり見られず、後半に発表したチームのほうが全体的にわかりやすい授業になっていた。15回の授業に授業見学を組み込むには時間がなく難しいが、授業見学の代わりとして、前年度の学生が行った模擬授業のビデオを見てもらうということも考えられる。前年度の模擬授業のビデオを見た感想をクラスで共有することで、学生の気づきや学びにつながるかもしれない。

3.3 初級文法の理解

3つ目の課題は、日本語の模擬授業で扱う初級文法の理解である。今回は各チームで指導

項目の初級文法を扱うときに『日本語の教え方 ABC : 「どうやって教える？」にお答えします』を使用した。学生だけでは文法の理解と整理が困難な場面が見られた。例えば1つの文法に2つ以上の意味・用法がテキストに示されている場合に、文法に対する理解が進んでいなかったり整理ができていなかったりするチームがあった。学生は全員日本語の初級文法を学習した留学生であるが、初級文法を教えられるほどに理解を深めている学生ばかりではない。初めて初級文法を学習した時によく理解できないままだったり、大学2年生となると来日してから時間も経過しているため既習の文法を忘れていたりする可能性も高い。また、初級文法が理解できているからといって、それを外国語である日本語で説明できるというわけでもない。日本語学や日本語教育学を専門に学んできた学生ではないため、扱う文法によっては人に説明できるまで理解を深めることは難しく、時間がかかると考えられる。教師からのアドバイスも有効であるが、まずは学生自身が教える文法について理解を深めるという経験をするのが重要である。今回使用したテキスト『みんなの日本語 初級Ⅰ 第2版 本冊』は教師用指導書も出版されているので、それをうまく活用したり留学生にもわかりやすい参考書を紹介したりして、文法の理解を深める時間を設けることが必要である。

3.4 わかりやすい教え方についての考え

4つ目の課題は、「わかりやすい教え方」について学生自身で考える時間をもっと設けることである。「わかりやすく教える」ことを授業の目的の一つとしていたが、学生がこのことについて考える時間が十分確保できなかった。母語の模擬授業と日本語の模擬授業の終了後に、課題として振り返りシートに「工夫した点」を書いてもらったが、内容を見てみると、こちらの「わかりやすく教えるために工夫した点」という意図がうまく伝わっていない学生がいることがわかった。また、「わかりやすく教えられなかったこと」をそのままにせず、「どのように解決できるか」を考えてもらう場も設ける必要があったと考える。

「わかりやすい教え方」は「相手にわかりやすく伝える手段」にもなりうる。今後は、チームで模擬授業について振り返り、わかりやすく教えるために工夫した点は何か、わかりやすく教えられなかったことはあったか、あった場合はどのようにすれば改善できるかということについて考える時間を確保し、クラス全体で共有することも考えたい。

4. おわりに

本稿では、2022年度後期の日本語専攻演習Ⅱbで留学生が直接法で日本語を教える体験を取り入れた授業について、その取り組み内容を報告し、課題について検討した。課題として考えられた点は、以下の四点にまとめられる。

- ①母語の模擬授業を行うにあたり、その目的を明確化すること。
- ②授業見学の代わりとなるものを取り入れ、学生の気づきや学びにつなげること。
- ③教える初級文法について理解を深めること。

④わかりやすい教え方について学生自身で考え、共有する場を設けること。

前述のとおり、この授業の受講生は日本語学や日本語教育学を専門に学んだ学生ではないため、「導入」の方法や初級文法の理解などで、筆者が想定しているよりも多くの時間がかかる場所があった。日本語の模擬授業後に学生が提出した振り返りシートにも「道具が多いので、速いスピードで教えたので、道具をぐちゃぐちゃになった」「学習者が今何をするかあまりわからないと気付いた」などと記載があることから、学生にとっても想定外のことが起こり、大変だった様子が窺える。一方で、「教えるとき、自分ばかりに相手がわかると考えることがよくない」「日本語を教えるにはモデルがあるが、学習者や授業内容によって、様々なことを考えなければならない」などの意見があり、模擬授業の体験を通して学生が得られるものがあったこともわかった。このような学びがより多く得られる授業とするためにも、今回示された課題についてよく検討し、今後の授業に取り組みたい。

〈参考文献〉

- 国際交流基金（2007）『初級を教える』ひつじ書房
清ルミ（2009）『DVDで授業の流れがわかる 日本語の教え方のコツ』アルク
大和祐子（2017）「日本語を母語としない実習生による日本語教育実習の意識と課題」『大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究』15号 大阪大学日本語日本文化教育センター pp.1-17.

〈参考 URL〉

- 厚生労働省「『外国人雇用状況』届け出状況まとめ」令和4年10月末現在
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_30367.html（2023年9月30日閲覧）
厚生労働省「就労場面で必要な日本語能力の目標設定ツール -円滑なコミュニケーションのために- 使い方の手引き 2020」
<https://www.mhlw.go.jp/content/11800000/000773360.pdf>（2023年11月30日閲覧）
国際交流基金「海外の日本語教育の現状 2021年度 海外日本語教育機関調査より」
<https://www.jpff.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey2021/all.pdf>（2023年9月30日閲覧）

〈注〉

- 1 このDVDは日本語の学習経験がない外国人を対象に日本語を教える授業が収録されている。外国人の学習者は仕事をしている社会人である。
- 2 「基本練習」「応用練習」という呼び方は『初級を教える』（国際交流基金2007）で使用されている用語に倣った。
- 3 評価内容は「声の大きさ」「スピード」「導入」「練習」「活動」「教具の使い方」「指示の出し方」「全体的なわかりやすさ」の8項目で、Google フォームを使用して行った。評価は5段階評価で「とても良い」を「5」と設定した。
- 4 稿末資料1を参照。
- 5 稿末資料2を参照。

稿末資料1：模擬授業（母語）の振り返りシート

振り返りシート（母語を教える）

名前（ ）

以下の点から、授業を振り返って記入してください。

① 模擬授業で工夫した点

話し方（発音・スピード）、教具の使い方、練習の仕方、板書の仕方、教える順番など。

② 改善点

話し方（発音・スピード）、教具の使い方、練習の仕方、板書の仕方、教える順番など。

③ 自分の模擬授業のアンケート結果を見て考えたこと

④ その他

稿末資料 2：模擬授業（日本語）の振り返りシート

振り返りシート（日本語を教える）

担当した課（ ） 課 文型（ ）

名前（ ）

模擬授業を振り返って、箇条書きで記入してください。

① 工夫した点

話し方（発音・スピード）、教具の使い方、導入・練習・活動の方法、板書の仕方、教える順番など。

② 実際に模擬授業中、学習者の反応はどうだったか。（気づいた点など）

話し方（発音・スピード）、教具の使い方、導入・練習・活動の方法、板書の仕方、教える順番など。

③ 模擬授業を終えて、どうだったか。（うまくいった点、改善点、その他）

●うまくいった点

●改善点

●その他

④ 日本語専攻演習Ⅱbを通して学んだことは何か。